

## コラム47：アメリカの旅 （2015・11・8）

「どこかへ行きたいね」細君がなにげなく呟きました。今年の春先、彼女は去年の秋の乳がん手術のあとを受けた胸部再生手術をしました。そのための3週間の入院生活を終えて退院した頃のことです。「元気な時に行かんと、年とったら行けなくなるよね」さらに妻の視線が私に迫ってきます。＜またぞろ「お出かけ好き」の血が騒ぎだしたかな＞などと思いつつ、私は妻が今年の9月で長い長い「会社勤め」を終えることに気が付きました。＜なにか喜ぶことをしてやらんといかんかな＞などと考え始めたのです。「そいじゃあ、この機会に思い切って行ってみるか！」トタンに妻の顔に笑みが浮かび、即座に旅行の話が決まったのです。

「どこに旅をするか」という議論は、私達には必要ありませんでした。旅行を決めた時に思ったことが、私も妻も同じだったからです。「アメリカにいる友人たちに、会いに行こう」ということです。彼らは親戚という関係ではなく、3年前に他界した義父の友人(Motoyama氏)の子供さんになります。(コラム24:父の青春その1 参照)) 私たちとほぼ同世代で、日系三世なのです。私達が3回渡米し、彼らが1回来日したことで親しくなりました。その後毎年のように、クリスマスカードやメールの交換をしてきました。そのたびに「いつか会いたいですね」「いつか行きます」という話を毎年繰り返し、最後に会った時から、いつの間にか13年もの歳月が経過していたのです。ハワイならともかく、LA(ロサンゼルス)は遠いですからね。



米国・LA 時間 9月30日午前9時30分 リトルウキョウのホテルロビーで私達はずいぶん久しぶりに再会。「Long time no see!」(ほんまに久しぶりじゃねえ)8年前に他界された Motoyama 氏の長男 Dale(デイル 71歳)と長女の Marsha(マーシャ 64歳)がきてくれました。二人とも私が思ったより若々しく元気そう! ハグをしてお互いに元気であることを確認したら、ホテルを出て近くの地下鉄へ。アメリカの地下鉄は初めての乗車です。「Where are we going?」(どこへ行くの?)「大学へ行きましょう!」乗り換えを一度して、ほどなく到着です。

駅を降りると、すぐ目の前に「USC」と記した茶色の大きな建物 University of Southern California 南カリフォルニア大学に來たのです!「ここが大学?」思わずマーシャに聞きました。日本の大学のイメージと違うのですよ。大きな正門があるわけでもなく、校内のしきりや柵があるわけでもなく、まるで広い公園の中に入っていく感じで、自由に入れるようです。「すごく広いね」「そうでもないわ。UCLA だともっと広いわよ」聞いてみると、なんと彼女はこの大学の出身。専攻は薬学とのことで、彼女は今風に言えば、リケジョ(理系女子)だったということですか。当然ながら彼女がいた頃とは、ずいぶん学内は変わっているようで、広いキャンパスの中を学生に聞きつつ、案内板を頼りに歩きます。



やたらと広いせいか、学生で溢れているという感じはなく、ゆったりと落ち着いた雰囲気ですね。

それでも後で調べてみると、学生数4万人とありますから、かなりのマンモス大学です。学内でやっている即売会やTシャツのバーゲンでも、誰でも入って買うことができるのですから、街の中に大学のあるブロックがあるという感じですね。大学が市民生活の中に完全に溶け込んでいる感じで、こちらでは年齢に関係なく大学に入る人が多いというのもうなづけます。肩書や就職ではなく、学びたい人がいつでも大学で学ぶことが出来るという社会はいいですね。



校内で路上ライブをやっていたり、スケボーなどで移動している学生が目につくとか、白人、ヒスパニック系、アフリカン、アジア系など、とにかく種々雑多な民族のルツボという感じで、日本とは違うな、という印象はありますね。医、工、法、教育などの学部がある総合大学ですが、特に映画芸術学部は世界的に有名で、映画産業に従事している卒業生が1万人、アカデミー賞を獲得した人が50人というのはスゴイ数字です。ジョージ・ルーカスが寄付したという校舎にも行きましたが、成功した卒業生が建物を寄贈するというのは、いかにもアメリカらしいと思いましたね。「日本人の留学生は、今は少ないみたいね」マーシャが呟きました。今の日本の学生は、海外に出ることを嫌がる風潮があるらしいのですよ。すこし寂しい気持ちがしました。

私はこの大学に来て見たかったのですよ。この春にNHKの教育(D-2)の白熱教室というシリーズ物の番組で、この大学の映画の講義が1時間ずつ4回に渡って放映され、大変興味をもったのです。今回の旅の前に友人と何度もメール交換をして、短い滞在の間に私たちの行きたい場所を伝えたのです。私の希望は、大学と日系人博物館。妻の希望はMotoyama氏夫妻の墓参りとハリウッドの散策でした。滞在期間が本当に少ないので、今までの旅行で行った観光地などはすべて省き、行きたい場所を絞り込んでいたのです。

実はこの大学の構内に入ってからすぐに、私は意外なものに遭遇しました。広い緑地帯があり、沢山のテントがあり、即売などをやっているらしいのです。何か「赤いもの」が並んでいます……<イチゴ！こんな所で！こんな時期に！>感動して、駆け寄って見ると、けっこう立派なものがズラリと並んでいます。「食べてみよう！」私は躊躇なく妻に叫びました。「1パック2ドル・3パック5ドル」という表示がありました。とにかく1パック買い求めて、木陰に入って4人で分けて試食。「けっこういけるね！」



あまり味には期待していなかったのですが、十分な大きさと、ほどよい硬さ、この時期としては甘味も合格点です。円安の進んでいる昨今、1パック(250g位)200円～240円ですか、安いですね。先だっのTPP(環太平洋連携協定)の合意をうけ、「イチゴやトマトなどの9品目は価格下

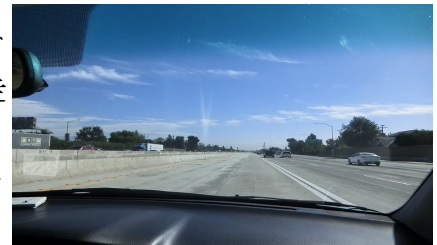


落が懸念される」という見通しが、最近の新聞に発表されています。「恐るべし！アメリカのイチゴ」というのが、今の私の感想です。少なくとも夏から秋にかけてのイチゴ生産農家には影響があると思いますね。「今の時期に一体どこで作っているの？」マーシャ曰く「きっと山の高い所で作っているのでしょうね」LAを一つの都市と思ってはいけません。Greater Los Angeles(グレートロスアンゼルス)といって、広い意味でのLAは関東平野に匹敵する面積があり、広い海も高い山もあるのですよ。それにしてもイチゴを売っていた中南米系のヒスパニックとおぼしき男は、あれだけの量を完売したんですかね？よけいなことですが少し気になります。



大学を出た公園でマーシャの夫であるLenard(レナード 66歳)が車で迎え。彼は運送会社を経営している長身の中国系米国人。車はLAの中心部ダウンタウンから、縦横に走るFree Way(フリーウェイ 無料の高速道路)にのって一路郊外へ。広い道路の6車線すべてに車が溢れ、凄まじいスピードで走行しています。ちょっと隣の車線の車と接触すればクラッシュして大惨事、という感じで「恐怖」を感じます。

途中で私は奇妙なことに気づきました。私達の車の走っている一番左サイドの車線のみが、極端に車が少ないのです。レナードに聞くと「これはExtra Wayといって、車に3人以上の場合だけ走れるんだ。一人の場合は有料になるよ」あとで別の運転手に聞いたら2人以上などと言っていたので、走る場所にもよるのかもしれませんが。高速に入線する際に信号がある場所もありますし、一般道では正面の信号が赤でも右折の場合は車が出てもOKのようです。とても自分で運転してアメリカを旅行する気にはなりませんね。



Cemetery(共同墓地)に向かう道中で車を運転しているレナードとしばし雑談。「You are still playing basketball?」(まだバスケットやってるの?)「コーチをすることが多いけど、自分でもまだやるよ」「スゴイね!」「週に3回くらいジムで体を鍛えているからね」どおりで身のこなしが軽いはず。彼は私と同年で、私の子供たちと同じ年頃の長男と長女がいます。仕事のことも、ちょっと聞いてみましょう。「How about your business?」(会社の景気はどうか?)彼は日本の会社と提携しているという話をしていましたが、私の英語力ではよく理解できませんでしたね。「I'm lucky」(僕は運がいいんだよ)と言っていましたから、この厳しい経済状況の中でも、彼の会社は幸いにも順調のようです。

高速を郊外に向かって走ること約30分で到着。ゲートに入ってすぐにマーシャが降りて花を買ってきました。墓地に着いたようです。きれいに芝生が植えられたなだらかな斜面を広い道路が走っています。<墓はどこにあるんじゃないだろうか?>しばらく車で走り、降りてみて気が付きました。ゴルフ場のようによく整備された広々とした斜面全体が墓地で、草地の中にプレートが埋め込まれているので車から見えなかったのです。

「BELOVED HUSBAND FATHER AND GRANDFATHER」(夫、父、祖父として愛された)とMotoyama氏の墓には記されていました。1918-2007とありますから、今から8年前に89歳で亡くなられたことになります。奥さんはその翌年に84歳で亡くなっています。墓に向かって手を合わせながら、私は3年前に逝った義父のことを想っていました。今から80年以上も昔の戦前の日本、ともに青春を過ごした二人の青年。一人は広島市内の寺町の寺院の中にある墓所に眠り、一人は広々とした緑の丘から、ロスアンゼルス(ロサンゼルス)の街を一望に見下ろしながら眠っている。最後に眠

る場所は随分と遠く、異なった場所になったものです。どちらがいいなどとは言えないのですが、  
＜こんなに広くて明るい場所から、自分の住んでいた街を見下ろしているんだ＞と思うと少し羨ましいような気持ちになりましたね。



「Rosehills Memorial Park」(ローズヒルズ メモリアル パーク)「ここは LA で一番大きい墓地なんだ」レナードが一言。私は自分の英語力に不安を感じながら、フツと湧いた疑問をマーシャに聞いてみました。「日本では墓に入る時には大抵は火葬だけど、こちらではどうして土葬なの?」「それは多分宗教の関係なのよ。キリスト教の場合は BODY(体)で埋葬するけど、仏教の人はこちらでも火葬して ASH(灰)で埋葬するのよ」ちなみに日本では先祖代々の同じ墓に入ることが多いですが、こちらでは一つの墓には二人だけということになっているようです。

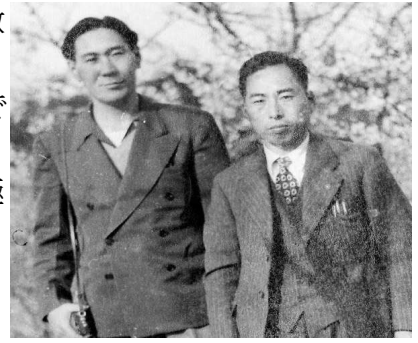
夜はレナードとマーシャの住む Pasadena パサデナの街のレストランで夕食。デイルの妻の Violeta(ビオレッタ 54 歳)が来て、まずは熱いハグ。これで全員そろいました。＜会えて良かった!＞今回は会うのは無理かもしれないと思っていたのです。席に着くなり「Sorry! Two families from Canada came here today!」(ゴメンね! 今日、カナダから 2 家族も来ちゃったのよ)このことは来る前のメールのやり取りで、あらかじめ聞いていました。彼女は、ニカラグワ生まれのカナダ育ちのアメリカ人。英語以外に、スペイン語とフランス語に堪能で、英語を話せないアメリカ人に英語を教える学校の教師をしています。



食事をしながらしばし歓談。私達に十分な英語力があるわけではないのに、一体何の話をしていたのでしょうか。不思議なくらい心地よく、話が尽きないのです。＜いつまでも話したい＞そんな気持ちになりましたね。お互いに異国の地に生まれ、これまで全く違った人生を送ってきたにもかかわらずです。ほぼ同世代のせいでしょうかね。お互いの年齢の話になると、ビオレッタが「私がこの中では一番若いわよね」とおどけています。でも年の割にみんな元気で変わってないですよ。ビオレッタがヒスパニック系のせいでしょうか、少し太めになったですかね。(絶対に口に出しては言えないことですが)この前に会った時から 13 年もの年月が経って、みんな若いという年齢ではなくなったものの、気持ちはまだまだ老いていませんね。

「どうして私達はここにいるのか」という、つながりの原点を辿ると、今から 80 年以上も過去にさかのぼります。私のオトウサン(義父)と Motoyama 氏との出会いの舞台は、通学の電車の中だったのです。二人は当時広島市の郊外の地御前村(現在の廿日市市)に住んで、市内の旧制二中(現在の観音高)に通っていたのです。年齢はオトウサンが 1917 年(大正 6 年)生まれで学年は一つ上になります。当時の写真を見ると、二人は身長だけでなく、性格も対照的だったようで、「無二の親友」として学生時代を過ごしたようです。(コラム 24: 父の青春 参照)卒業後、Motoyama 氏は渡米。二人は日本と米国に別れて暮らす中で、やがて日米の開戦、厳しくツライ時代を生きることになります。

日米間の戦争という渦中に生きた中で、オトウサンは高齢での徴兵や被爆を体験しました。おそらく Motoyama 氏も日系移民への厳しい弾圧のあった当時の米国社会で、相当の苦労をされたであろうことは想像できます。その後二人が再会するのは、1945 年（昭和 20 年）8 月の、日本の敗戦の後のことになります。氏は「極東軍事裁判」の通訳という肩書で日本に戻ってきたのです。その時の写真を、今回レナードの家のパソコンで初めて見る事ができ、メールで送ってくれました。二人ともまだ 30 代になったばかりの頃、若々しいすがたです。



その後、彼がどのような人生を歩んだのか、詳しいことは知りません。確かなことは、オトウサンとほぼ同じ頃に一男一女に恵まれたこと、そしてその後、おそらくは幸福と言える人生を送られたのではないかと、ということです。二人は今、広島とロスアンゼルスという異なった空の下で眠っています。一人は日本人として、もう一人は日系二世というより、米国民として……

「齢をとるいうんは、だいたいワライことばかりじゃが、元気でおりゃあ、たまにゃエエコトがあるもんよ。はいじゃが、人と人のツナガリいうのは面白いモンよう」

◎今回のコラムは、かなりの長文になりますので、以前の「戦後歌謡」と同様、3 部作くらいに分けて書いてみる予定です。

